

# 南風

くみなみかせく

寺報 第九号

平成二十六年 冬

〒543-0063 天王寺区茶白山二-三十六

電話 〇六一六七七九-九四三五

〇六一六七九四-〇五八三

携帯 〇九〇-二〇四八-三二八九

真宗大谷派 松濤山 南照寺 (なんしやうじ)

編集 発行 南照寺住職 友澤秀三

\*\*\*

あけましておめでとうございます。  
本年もどうぞ、宜しくお願いいたします。

平成二十六年 (西暦二〇一四年)

\*\*\*

ほとんど呆然とするぐらい、やらなければならぬことが沢山あった年末年始でした。

「あつた」と過去形にしていますが、今も実は進行形です。気のせいならいいのですが、仕事は減っていないような感じすらします。今回はその報告を先ず書きましょう。

昨年十一月三十日、倉島さんから全ての鍵を手渡され、一二月一日からは南照寺が法務だけでなく、「生活の場所」となりました。庫裏その他を、なんとか早く自分たちの身の丈に合うようにしなければと、片付けたり掃除したり、また逆に家財を運び込んだり始めた、その矢先の一二月四日、先代代の坊守のトシ子さんの訃報が入ったのでした。

寺族の葬儀にはいろいろ決まりごとがあつて、それにきちんと則って進行しなければなりません。それは葬儀の規模によっても変わりますし、場所柄にも左右されます。南照寺は二組の寺院ですので、組長にまず連絡して相談しな

ければなりません。こちらは勿論わからない事ばかりなので、いちいち御指示を仰がねばよろず何事も立ち行かず、すべてにおいて段取りが悪かったように思います。私の全力を尽くしたのですが、至らなかつたさまざまな失礼をここにお詫びいたします。

五日、組長の宝山寺住職、前組長の行圓寺住職と共に通夜。

六日、副組長の宗恩寺住職にも御出仕いただき、南照寺住職の導師で三ヶ寺一役、四名で南照寺に於いて葬儀が営まれました。坊守会長の行圓寺坊守、副会長の光圓寺坊守も受付など細々としたことに奔走いただきました。有縁の御寺院方も弔問にお越しくくださいました。さらに通夜、葬式を通して、御門徒の方々を中心に沢山の御参列があつたことを、深く御礼申しあげます。  
いいお天気でした

その後も本山関係の必要書類や手続きなど、一週間以上かかりました。電話などの名義等も変更しなければなりません。困つたのは本堂、庫裡の襖、障子の類で、時間とともに狂つてしまつていて、全くびくとも動かないものが結構あつたことです。のこぎりやノミを出して来て頑張つてみたのですが、明らかにこれは素人ではどうにもならない域に達していることを悟りました。無理を言つて、二十八日ギリギリに大工さんに来てもらえて助かりました。

さらに来客もあり、修正会の準備は遅々としてはかどりません。お花を生ける器具を調達したり、注文していた鏡餅を受け取つたりしておりましたら、携帯が鳴りました。

三十日お通夜、三十一日葬儀。於京都。

元旦もいいお天気でした。

午前十時からの修正会には御家族で参拝いただけただけもあり、立花や掃除等の準備が間に合つて本当に良かったです。きちんとお勤めできました。

お墓参りは年末に来られる人が多いのですが、年始に、という方も勿論あります。初めて

お目にかかる方も少なくありません。その方々の目に、この新しく動き出した南照寺はどのように映ったでしょう。気がつけば、すっかり遠くまで来てしまった感があります。外海にまで出てしまった帆船からは、もはや陸地は見えません。前を向いて進んでいくのみです。

\*\*\*

昨年十二月より毎日、時によっては午後になつてしまうこともあるのですが、本堂や庫裏の全ての雨戸を開けます。天気の良い日は、冬の長い日がさして、びつくりするぐらいに明るいです。そして肌触りのいい、心地よい暖かさが広がるのです。

南照寺の名称について、

「上町台地ノ南端ニ在リテ、不可思議光ニテ照ラシムル寺院」

というように受け取っていたのですが、こうやって実際生活してみると、むしろ、

「上町台地ノ南端ニ在リテ、不可思議光ヨリ照ラサル寺院」

というのが、本当なのではないのかなあ、という気がしてまいります。

お日さまの光によって「不可思議光」を全身で感じとらしめる。阿弥陀仏の本願の体感。

「光」は、浄土真宗では非常に大事にしている比喻でありまして、たとえば『正信偈』を開いてみると、人々の無明の闇を破る光明「十二光」として讃えられています。(無量光、無辺光、無碍光、無对光、光炎王、清浄光、歓喜光、智慧光、不断光、難思光、無称光、超日月光。)

またその最初の二行目には、「南無不可思議光」とあります。この場合は直接「不可思議光如来」を表しているわけで、「阿弥陀仏」と同

じ意味です(御自宅のお仏壇をごらんください。左側の掛け軸は「南無不可思議光如来」と墨書されているでしょう)。

二十一世紀の都会に暮らす私たちは、毎日太陽が東の空から昇って来ているということに、ほとんど無関心な生活をしています。暗いなら電気をつければいいし、寒ければ暖房を入れればいいし、レタスだって蛍光灯で栽培する時代です。いくら阿弥陀のはたらきをお天道様に譬えても、ありがた味を知る感性が衰えてしまつては、助かりようも救われようもありません。

街は真夜中でも明るすぎるほど明るく、闇は一掃されました。同時に、夜空の星という星が全て消されてしまいました。希望の星も見失つて、人の心の闇は、かえつてますます広く深くなりつつあるようです。

そんな若い人たちに届くように、仏教の話をしてくださいと請われました。そのためには彼らのいるところまでこちらから出向いていかねばなりません。今彼らは、インターネットの電波の上に浮かび上がる「幻」のようなものを、自宅のコンピュータから、また手鏡ぐらいの大きさの携帯電話機の画面から一心に見つめています。そこへ入ってはくれまいか、と。

リラククスした場での対談をウェブに流す企画なのですが、お受けしました。南照寺のホームページも近々立ち上げていただけるようになります。

今やグーグルの検索地図からも消されてしまった、いわば忘れ去られた状態から、一度も寺に來た事もない人たちが大事にしたい、時間を共にしたい場所だ、と思える南照寺へ。

舵は切ってみます。

向きはうまく変わるでしょうか。

今年最初の「お勤めの会」は

一月十八日(土)午後二時より

南照寺本堂にて、お待ちしております。